
元バカと黒髪美少女と薬師

化科学（かがまなぶ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元バカと黒髪美少女と薬師

【Nコード】

N5786R

【作者名】

かが まなぶ
化学 学

【あらすじ】

明久と翔子は幼なじみでオリキャラ理科とも幼なじみ。

化学者で且つ科学者。薬学の最先端は阿部あべ理科りか！？

Fクラスはさらなる過激さ（過激者？）を加えて、試召戦争に突入する。

第一問（序章） 過去の夢（とおいむかしのやくそく）（前書き）

バカテス新作。

Dr・クロさん、の意見を元に書かせていただきます。

至らぬところもありますでしょうが、よろしくお願いします。

第一問（序章） 過去の夢（とおいむかしのやくそく）

“——……？”

泣いてる？——これっていつの……

『ぼくは、何があつても、理科の味方だから！』

『……私も。ずっと友達』

…ああ、そうか。

『…うん！』

そっか……。…あの頃の事が……

“「明久、翔子……約束よ。ずっとずっとずっと、友達だって」”

『もちろんだよ！ 約束するっ！！』

『……約束』

——夢を見た。

……遠い遠い昔の夢を……変わらずにいるのかしら……？ 守れて
いるかしら……あの頃の、あの時の約束は——褪せずにいるのか……
…ふふっ。あの頃以上に仲良くなったのは、いい変化ね。互いに反
応しあつてお互いを深めあつ。……まさしく化学反応。

今日は気分がいいわ。もう一眠り……おやすみ、明久、翔子……

z
z
z
⋮
⋮
⋮

第一問（序章） 過去の夢（とおいむかしのやくそく）（後書き）

はじめましての方、はじめまして。知ってる方は、どう思っでし
ようか…？

おはこんにちばんは。（いつ読んでも大丈夫な挨拶）
おやすみが良かったか！？

こんな作者がお送り致します（笑）

では、また。

第二問 寝顔×登校×爆殺？（前書き）

更新。

とりあえず。どぞ。

第二問 寝顔×登校×爆殺？

ブルツ 寒い……目が覚めちゃうじゃない。全く。ふぁ……z
zz……

「あー遅刻しちゃうつ！ って、立って寝ないで！？ 危ないから」

明久に手を引かれる。楽だわ、ホント。

このお人好しを絵に書いたようなのが、幼なじみの吉井 明久（
よいし あきひさ）。

薬学界の天才で最先端。さらには、god of drug（神
の薬）と呼ばれ、四大天使に数えられる存在である、archa
ngel（アークエンジェル＝大天使）Raphael^{ラファエル}の生まれ変
わりだとも言われる、この阿部 理科（あべ りか）と友達どころ
か、幼なじみ。だからといって、他の友達と変わることなく、接し
てくれる友達。

「また遅くまで実験してたんでしょ？」

「こくり」

「実験する時は、僕に声かけてって言うてるよね？ 何かあってか
らじゃ、遅いんだよ？」

そう……。 “明久” に何かあってからじゃ遅過ぎる。

「忘れてたわ」

「また？ 忘れないように、顔に書いた方がいいかもね」

「それじゃあただの嫌がらせじゃない」

「僕が気づけば、付き添えるでしょ？」

そうね。だとすれば、……きつとまた“忘れる”でしょうね。

「聞ってる？」

「こくりこくり」

この文月学園に入学してから二度目の春が来た。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っていた。風が吹き、桜の花弁が ゆらゆら と舞踊る。

その風景に、一瞬目が奪われ——ることなどなく、こくり…

この文月学園へ通学途中、二度目の眠気が来、た…。

「本当に「こくり」——聞いて「こくりこくり、…こくり」
——る？ つて、どれだけ頷くのさ！」

「ごめん、おはよ

「寝てたの！？」

「吉井、阿—— ドガンっ！ めおッ！?!？」

避けられたか……

第三問 そのもう一人の幼なじみは……（前書き）

今回は、ARIAっぽいタイトル。

因みに前回はHUNTER×HUNTER。

第三問 そのもう一人の幼なじみは……

「何やってるのさ!？」

「びつくりした。寝起きにあんなもの見せられちゃ抹消もしたくなるわよ」

地球に重力があるのと同じくらい仕方のない事だから。

「さて、問題です」

「理科の行動が一番問題だからね!？」

「先程使われた爆発物の薬品は何でしょうか？」

(1) エチルエーテル

(2) 1, 2 ジクロロエタン

因みに、どちらも発火、爆発を起こしやすい代物。

「よくそんな物持ち歩いてたね!？ バスとか電車通学ならどうするつもりだったのさ!?!？」

「護身用に常備」

「車内のアナウンスでも言ってるよね!？ “車内への危険物の持ち込みは”って」

「大丈夫よ。扱い慣れてる」

「そういう問題じゃないよ!？ それに警官に職務質問され――」

「学生と答えればOKよ。もしくは、護身用に常備って」

「護身用にじゃ通らないからね!？ かなり物騒だから! あと、職務質問って、そのまま仕事してますか? してませんか? 聞くってことじゃないんだよ!？」

それに何より、“1, 2 ジクロロエタン”なんて皮膚に触れた

だけで危険な薬品だよ?」

「吉井」

「何でしょうか!?!?!」

「落ち着け。それと……霧島がおまえの真後ろで待機してる」

「何イツ!?!?!」

明久のホントに真後ろ。数cmしか離れてない。明久の影かと思
紛うほどに……いや、むしろアレは守護霊ね……バツと振り返
った明久。絶妙な機動で明久との距離を維持する翔子。

「近っ! 翔子ちゃん、近い!」

「……おはよう明久」

翔子は明久をハグする。相変わらず仲いいのね。

「翔子、おはよ」

「……理科、おはよう。…明久は、してくれない……?」

「翔子ちゃんおはよう。って、僕を抱きしめながら挨拶はやめて!
?」

「仕方ないわね……交ざれっていうんでしょう?」

明久ったら、仕様がないわね。

「言っていないよ!?!」

「吉井。おまえも大変だな」

「見ていないでなんとかしてくださいよ!」

「俺は馬に蹴られたくないからな」

「馬??!」

「男なら、甲斐性を見せてみる。吉井」

うん。明久に言っても無駄。翔子だって、坂本雄二のこともあるし。

「複雑ね……」

「結局抱きしめるの!？」

あー……教室までの距離が遠い……誰よ、こんな遠くしたの
——あ。藤堂カヲルさんだったわ……

第四問 トライアングラゝ殺人未遂事件（前書き）

コナンイメージ。

きーみは、だーれとキスをする♪

キスっっーか、アレやけど……

第四問 トライアングラー殺人未遂事件

明久は、Aクラスの前で別れを告げる。

「じゃ、翔子ちゃんまた」

「…明久、私を置いて行っちゃうの？」

「置いて行くとかじゃなく、仕方ないっていうか……」

「翔子、仕方ないんだってさ」

「…置いて行くのは仕方ない？ 私、いらない子……？」

「違う違う違う！ そうじゃないんだよ。ただ……クラスが違うんだ……」

「！」

あ。驚いてる。

「……………盲点だった」

「ええっ！？！？！？」

「さつき、鉄巨人に言われたばかりじゃない。仕様がないうね」

「…明久が私を誘惑してた」

「してないよ！？ それに僕なんかの誘惑に負ける人間は存在しない」と――」

スッ と翔子と共に挙手。 じいー っと明久を見つめる。

「――落ち着いて！？ とりあえずとっても腕のいい脳外科医を紹介するから、メモの準備して」

「…解った（わ）」

「代表もそつちの子も、解っちゃダメなんじゃないかなあ」

「「なんで？ 明久が必要だって言ってるのに」」

「あはは……あー…そつちの……明久くんだけ？ キミも自分をそんなに卑下しなくてもいいと思うんだけどね」

「僕がカッコよくないのは、ホントのことなんだけどね」

「「そんなことない！」」

「…明久はカッコいいし」

うん、うん。

「ホントに？」

「…可愛いし」

うん、うん。

「え？ え？」

「…襲いたくなる」

うん、うん。

「最後のは明らかにおかしいよね！？」

「あはは、二人共面白いね」

「？ 見かけない顔ね。初めまして。かしら？」

翡翠の様な綺麗な色合いの短い髪と元気な印象を受ける笑顔と相

まって、ボーイッシュという言葉がしっくりくる様なそんな子。

「うん、そうだね。初めましてだね。」

去年の終わり頃に転校してきた、工藤愛子（くどう あいこ）って言います。スリーサイズは…上から78・56・79だよ。」

「僕は、そんなっ全然！」

「興味…ない？」

明久が ごくり って唾を飲み込んだ。津々ね。どう見ても。

「育て甲斐あると思うんだけどなあ〜」

「育てるとか喜んで、じゃない、解らないな、僕は」

嘘。目がきよどつてる。

「ホントにい〜？」

「も、もちろんだよ。工藤さんが「愛子」——へ？」

「愛子でいいよ、ボクも明久くんって呼んでるしね？」

「えっと……あ——」

「そうそう。愛子って呼んでくれたら、胸触らせてあげるからね」

——（葛藤中……）

悩む時点で、触りたいって言ってる様なものなのに。

「あ、愛子……あ、でも、僕は別に」

「どうぞ？」

ゆっくりと手を伸ばし始めた明久に、翔子が宣告。

「……私は悲しい」

「翔子ちゃん、これはあの……」

「……私が明久の未来を奪う事になるなんて……」

「ちよっ！ やめて、翔子ちゃん！ まだ未遂だし、その場の雰囲気と言うかノリと言うか……」

「明久は変わってしまったわ……翔子、手を貸すわ。これ使って？ 大したものじゃないけど」

「……何？」

「1、2 ジクロロエタン」

「コイツ、本気で僕を殺す気だッ！！！」

「あ、あはは………」

ちよっとからかうつもりが、既に殺人未遂事件に発展しつつあるし、むしろ発展途上の事件。この状況に工藤愛子の乾いた笑い声だけが常識を残した。

第五問 真面目生真面目糞真面目に不真面目（前書き）

Dr. クロさん、ヒョウガさんありがとうございます。

因みにタイトルは、怪傑ゾロリって感じです。小学生ん時読んだなーって思い出しました。

第五問 真面目生真面目糞真面目に不真面目

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの2年A組の担任、高橋 洋子（たかはし ようこ）です。よろしく願います」

大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女がそう告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。

贅沢…っていうか、壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイなんている？ デカければいいってもものでも無いでしょうに。黒板サイズで充分事足りるのが理解できないのかしら？

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備、不満のある人はいますか？」

Aクラスの教室は50人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつて、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料がエアコンは教室どこるか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになっているみたいだった。更に見渡してみると天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれてて——何処かのリゾート施設を意識したわけ？ 全くもって理解に苦しむわ……

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関し

ても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなくなんでも申し出てください。

では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

どっかから紅茶の香りがした。大和撫子って感じの翔子だけど、洋物も結構似合うのよね。

「……はい」

名前を呼ばれて前に出てきた翔子。黒髪を肩まで伸ばしてまるで日本人形のような綺麗な少女。女性から見ても魅力的に映る。

物静かな雰囲気彼女はそんな整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放ってる。

クラス代表——つまり2年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な生徒。

さらに言うなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはそのまま2年生のトップということになる。同じクラスに入れたはずなんだけど、仕方ない。

「……霧島翔子です。よろしく願います」

クラスみんなの視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げる。

その目はクラスメイトではなく、此方へと向けられている。

霧島は1年の時から有名で、その綺麗な容姿は学年を問わず知れ渡り、男子生徒からの告白が絶えなかった。だが、誰一人として彼女の心を動かした生徒はいない。だからって同性愛者だって噂が立つのはどうだろ。既に決まった相手がいるって考えに至れ無いほどバカなの？

「明久、手くらい振ってあげなさい」
「そだね」

明久が手を振ると翔子も手を振って返してきた。

「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

戦争ね……………カヲルさんに交渉権をつけられるか……………やってみましょうか。翔子もその事、考えてそうだし。明久はどうかしらね？

「明久、行くわよ」

「あ、うん」

「そうそう。“力”は隠しておきなさいね」

「理科はどうするの？」

「“力”って？」とは聞かないのね。つまりは、同じ考えを持っている。その上、方針とかもあるのでしょよね……………

「姫路より抑えようかな」

「Aクラス戦までは？」

ほら、ね？

「そうね。取り敢えずは、試召戦争を始めないと」

「できるだけ早く、だね」

「ええ。そうなれば、今日明日には仕掛けたいわね」

「そうだね。そうなれば、まずはDクラス。Eクラスは気にしなく

て平気だしね。姫路さんがいるのは勿論、僕達の操作技術って学園一だしね」

だから、まずはDクラス打倒。

「それにFクラス代表は、恐らく……」
「雄二。だろうね」

だとすれば、話は通しやすい。どう持っていくかにもよるでしょうけど。

「たぶん、ね。ま、とにかく、振り返きましょうか？」
「だね」

「「打倒Aクラス！」」

第六問 コリオ「獄寺」フレイヴェルン。あだ名はデイダラ。「芸術は爆発だ」

ヒヨウガさん、Dr・クロさん感想ありがとうございます。

タイトルに意味合いはありませんw 爆弾関係って感じですよ。

恋する司書、リボン、とある、ナルト。のキャラ達。

コリオの肉で、肉：柏崎星奈を思い出したのはオレだけじゃない！

別にオレは友達が少なくない。

はがないの、小鳩は可愛いよね？

第六問 コリオ「獄寺」フレイヴェルン。あだ名はデイダラ。「芸術は爆発だ」

2年F組と書かれた外れかけたプレートのある教室についた。廊下側の窓も割れ、這えば潜り抜けられるほどの穴も開いてる。……カヲルさんは、喧嘩を吹っ掛けているのだろうか…？

慌てている明久は無視して、教室へと入った。

「悪かったわね。遅れたわ」

「すいません、ちよつと遅れちゃいましたっ」

明久は、何処かで頭を強く打ったのね……

「可哀想に……」

「ちよつと待つて理科！ どういう事！？」

「あ、気にしないでいいわ。腕のいい医者紹介してあげるから。……めげるんじゃないわよ？」

「何それ！？ どういう事！？」

「傍についていながら、何もできなかっただなんて翔子や玲さん、親御さんに顔向けできない……うっつ……」

「僕のが泣きたいよ……！」

「黙って早く座れ、このウジ虫野郎共」

暴言を吐きつけてきた実験体は、——ああ。翔子の。……アレがね……。あんな猿推奨できない。……明久、がんばるのよ？

ゴリラこと坂本 雄二。あら？ 猿本だったかしら？ 180強の身長があり、程よく筋肉がついていてターザンだ。うん、解ったわ。ターザンと呼びましょ。

「酷いよ！ 先生っ！……って、…雄二？………何やってんの？」

「先生が遅れるらしいから、代わりに教壇に上がった」

「先生の代わりって…雄二が？ 何で？」

「ターザンがゲイを見せてくれるのよ？ 明久、席に着いて見物よ」

「ゲイ、ガチで頑張ってるね」

「お前らの言い方には悪意しか感じられんぞ？ 俺は、このクラスの最高責任者だからだ」

「「……へえー……」」

「なんかムカつくな、お前ら」

「ちょっと通して下さいね」

後ろから覇気の無い声がしたので振り返ると、そこには寝癖の付いた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえない風体の男がいた。……… the Fクラスって感じね。

「それと席についてもらえますか？ HRを始めますから」

恐らくこの人が、このクラスの担任。

「はい、わかりました」

「うーっす」

「ええ」

「えー、おはようございます。2年F組担任の――」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。

……チヨークすら碌に用意されてないのね。んゝ……勉強させる
気無し。と。

「――福原 慎ふくはら しんです。よろしく願います。

皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば申し出てください」

この教師に言うより、カヲルさんに直談判の方がより効率的で確
実よね。

早速手が拳がった。まあ、訴えたい気持ちは解らなくもないけど。

『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー。それと
彼女がいませえん』

「あー、はい。我慢してください」

……。

『先生、俺の卓袱台の脚が折れています。女友達さえいない現実に
心が折れています』

「木工ボンドが支給されています。…自分で直してください」

酷いわね。色々と……

『センス、窓が割れてていて風が寒いんです。それと、幼稚園や小
学校ですら女の子と仲良くなったことない事実^{じじつ}に人生が寒いんです
けど』

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してお
きましょう。頑張^{がんば}って補強してください」

この教室ら……燃^もそうかしら？

「……焼夷弾」

「何それ怖いっ！ どうしたのさ、いきなり」

それにしても、カビ臭い。たぶん床に敷き詰められている古い畳のせい。

「やはり、撃ち込むしか無いって言うの……？」

「何を？ ねえ、何を？」

「はい。では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名を受けて、廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げた。

「きのした ひでよし 木下 秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

相変わらずね木下は。…木下姉弟は、性別を間違えたのよ。木下“姉弟”じゃなく、“兄妹”ね。

「——と、言うわけじゃ。今年1年よろしく頼むぞい」

次は……

「……………つちや 土屋 こつた 康太」

限らない変態。相変わらず口数が少ないわね。何を考えているのか、解ったものじゃ……………いえ、解り過ぎるくらいに思春期の中学生っていう感じがしら？

ん？ 女子の声？

「島田^{しまだ} 美波^{みなみ}です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

島田美波…ね……

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツでしたので。趣味は――」

島田は、どう処理すべきかしら？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

「ちよっ！？ 島田さん！？！？」

ちょうどタイミングがいいし、ちゃんと警告しておかなきゃね。

「阿部理科よ。幼なじみを傷つける存在には、お薬を処方してあげるから」

『幼なじみって誰ですか？』

「明久よ」

『『『何いつ！？』』』

五月蠅いわね……。

『吉井明久に死さえ生温い制さ――』

ひょいっ

←

一口サイズの物体を投げ入れる。

←
パクッ カリッ
←

口の中の水分とナトリウムボロハイドライド + 酸化剤、アル
コール、酸 e t c …… 噛んだ時漏れた薬品の化学反応。つまり
は……………

『ズガン！ バアッ！?!?!?』
『近藤！』

——爆発。

「ふっ…汚い花火ね。——あと、誰だったかしら？ 処方箋が欲しいのは」

一人一人、目を覗き込む。

『『『 ブンブンブンブン！ 』』』

素直でよろしい。じゃ、あとは……

「はい。あゝん」

「嫌よ！？ あんなの見せられて口開けるワケ無いじゃない！」

「アレは、序ノ口よ？」

「序ノ口！？」

「Sodium tetrahydroborate（テトラヒド
ロホウサン ナトリウム）」

「え？」

「化学名又は一般名で言う『水素化ホウ素ナトリウム』のことよ。
『水素化ホウ素ナトリウム』っていうのはね、水に触れると自然発

火するおそれのある可燃性・引火性ガスを発生させるだけでなく、飲み込むと有毒で皮膚に接触すると有毒。発生させるガスによっても、重篤な皮膚の薬傷や重篤な眼の損傷、呼吸器への刺激のおそれのある危険物なの」

「何て物持つて来てるのよ!？」

「だから、『水素化ホウ素ナトリウム』」

『「「「「「そうじゃねえだろ!？」」「」「」「」』

ん？ まあいいわ。

あ、次は明久の番ね。

「あ、明久、貴様の番だ」

「ねえ。これって、ある種曝し首だよ……」

「明久、余計なことは言わずにさっさと終わらせてくれ。生きた心地がしねえ」

「解ったよ。仕方ない……」——「ホン。えーっと、吉井明久です。

気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

「明久がそう望むのなら……ダーリン」

『「「「「「ぐはっ!~!」「」』』

「……こんなつもりじゃなかったんだけど、……幸せをありがとう」

明久、意外と喜んでいるわね……。翔子に報告かしら？

第七問 理科のみが知るセカイ（前書き）

「理科ねえさまあつ」。えるとりゆうで？…るうと…まあしC。
明久とつるんだら、きつとマジカオス。

神のみ。も書きたいかな。

坂井千草さんのお話とか、ギャグまみれの恋姫とか、、なのは
も何種類も考えちゃってるww

書けないなあ。亀更新な自分じゃあな。。。

ま、そのうち書きますw むほー

ヒヨウガさん、Dr・クロさん、断空我さん。感想有難うござい
ます。

さっきこっちかきました。

では、どうぞ。

第七問 理科のみが知るセカイ

不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて大きい胸を上下させて、そこに手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

誰かが。って言うよりは、むしろ“誰もが”、というべきか。教室全体から驚いたような声が上がった。姫路だって人類よ？ びっくりする事無いんじゃない？

クラスがにわかに騒がしくなる中、平然としている福原先生が話しかけた。……初めて先生らしいと思ったわ。確定できないところが、この先生って気もしてきたわ。。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！ あの、姫路^{ひめじ} 瑞希^{みずき}といます。よろしくお願ひします……」

小柄な身体をさら縮こまらせて声を上げる。

白く透き通るような肌に、綺麗にキューティクルを光らせているふわっとした柔らかかそうな髪。誰にでも同じように気の使える優しさで愛しさと切なさ？……明久のバカが感染^{うつ}ったかしら？ まあ、それに加えて保護欲を掻き立てられるような可憐な容姿。と、同性から見ても魅力的に映るし、嫌味ったらしくない。人として出来すぎて……

「くうっ…意地でも泣くもんか！」

土屋に手の平を向けてから下ろす。

「写真は大丈夫よ、土屋」

「ムツツリー二は何をしてるのさ！」

「もう収めたから」

「理科！？いつも以上についていけないよ！！！」

「置いて行っちゃうのね…」

「どっちかと言うと、僕の方が置いていかれてるんですが……」

姫路がさっきからちらちらこっちを見てくる……ガン飛ばそうって？

「大人しい顔して…侮れないわね」

「理科。もう黙ってようか」

酷いわ。非道で外道で邪道で極道よ。

「あ、えっと…振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして…」

その言葉を聴いてクラスのみんなは『ああ、成る程』と頷いた。
試験途中の退席は0点扱い。

姫路は振り分け試験を最後まで受けられずに、結果としてFクラスに振り分けられたってワケ。

そんな姫路の言い分を聞いて、クラスの中から、ちらほらと言いつつ
訳の聲が上がってくる。

『そう言えば、俺も熱（——の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力が出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『はい、今年一番の大嘘ありがとう』

……何なのか……理解できないの。…枯れ葉剤を撒けば、大人しくなるだろうし…。けど、撒くところにも被害が出るし。無難に王水かしら？

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように雄二と明久の間の卓袱台に着こうとする姫路。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏した。何氣に行動力あるわね。

「あのさ、姫——」

「姫路」

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「え、あ、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

姫路が深々と頭を下げた。丁寧。姫路、さすが。と言ったところかな。

「ところで、姫路さん体調は大丈夫なの？」

「よ、吉井君。お陰様で今日来る事ができました」
「んーん。気にしないで。姫路さんが元気なら、それでいいんだ」
「は、はい！」

ターザンさんが何かを始めるようです。

「わらw」

「ところで姫路。明久がブサイクですまん」

「まだ続いていたのかっ!!」

明久の顔を見て驚いた姫路へ、ここぞとばかりに雄二が明久を弄る。

「そ、そんなこと無いです！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰——」

「誰よそれっ!?!」「そ、それって誰ですかっ!?!」

島田と姫路が同時に、明久の台詞を遮って聞いてきた。

「たしか、久保^{くほ}——」

「久保さん？ どの久保さん？」

「——利光^{としみつ}だったかな」

久保 利光 ↓ ♂ (性別/男)

「……………」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「もう僕、お婿にいけない…」

「もらってあげようか？ お嫁さんに」

「なあっ!？」

明久が耳元に唇を寄せて囁く。^{ささや}「言わないでよ？ 翔子ちゃんに」
つて。んっ…、くすぐりたい。

「明久、半分冗談で言ったんだ。安心しろ」

「え？ 残りの半分は？」

「姫路、本当に大丈夫なんだな？」

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！ 残りの半分は!？」

明久の話を流し、とりあわない雄二に対して、明久は大きな声を
出した。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

そのせいで、パンパン、と教卓を叩いて福原先生が警告を
してきた。

「あ、すいませ——」

バキィッ、バラバラバラ……………

突如、先生の叩いた教卓がゴミ屑と化す。

軽く叩いただけで崩れ落ちた。ほんと、ゴミ屋敷ね。……………んゝ力
ヲルさん、ここまでするかな？ これじゃあ、余計に勉強しなくな

る人間が増えるだけでしょうに…

「え〜……替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行った。

「あ、あはは……」

明久の隣で、姫路が苦笑いをしていた。

ん？ 明久が、真剣に考え込んで……。翔子との約束もあるしね。

さあて、どうしよつか？ 明久？

お互いに目を見て頷きあった。

第八問 え！？ 雄二と契約っ（パクティオー）！？（前書き）

暮灘雪夜さん、雪門さん、ヒョウガさん、断空我さん、感染…感想ありがとうございます。

断空我さん、今回も短いです…すみません。

こちらはちょこちょこって書いて行きます。メインで書いているのが疎かになるのは嫌なので、悪しからずご了承ください。申し訳ありません。

今回のタイトルは

『ネギま！』

契約…約束事に近いでしょうかね。

それではどうぞ。

第八問 え！？ 雄二と契約っ（パクティオー）！？

明久が坂本に声をかける。

「……雄二、ちょっといい？」

「ん？ なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

明久と坂本を追って廊下へと出る。

「んで、話つて？」

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「雄二、Aクラスの設備は見た？」

「ああ、すごかったな。あんな教室は他に見たことがない」

一方はチヨークすらないひび割れた黒板。

もう一方は値段も分らないほど立派なプラズマディスプレイ……

………確かにね。常軌を逸脱してるわ。

「そこで僕からの提案。折角2年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「…何が目的だ」

急に坂本の目が細くなった。まあ、明久は『観察処分者』のバカだと思われているでしょうしね。

「いや、だってあまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、ありえないだろうが」

「そんなことないわよ？　ねえ？　明久」

此処が異質な空間に感じるかもしれない。

坂本雄二という存在が、吉井明久と阿部理科の言葉の系（いとのけい）に絡め獲られる人形のようなのだ。

「もちろんだよ。個人的な理由はあるけれど、姫路さんのような体の弱い人に使い続けて大丈夫だと言える環境じゃないし、既に咳き込んで辛そうだったからね」

「藤堂カヲル学園長に直訴も考慮しているわ」

坂本、冷や汗？　気をつけて、風邪引くから。ふふっ。

「カビを吸い込めば体内で繁殖するからね……度々出して申し訳ないんだけど、姫路さんのような人だと日和見感染して皮膚にも症状が現れる可能性もあるし」

「ま、そうなればこの学園は終わりでしょうけどね。個人的に潰れてもらっては困る理由もあるの」

けれど…ま、貸しにしましょうか、カヲルさん。

「おまえらそれぞれに理由があるってか」

顎に手を当てて思考している。

「そうなるね」

thinking timeはお終いよ。

「それで？ 坂本雄二代表。結論は出たのかしら？」

「……興が乗らねえな」

よく言うわ。態々Fクラスの代表になるよう調整した男が。
明久に視線を送ると、少し笑みを深めた。ちよつとぞくつて
した。

「まあ、僕は別にいいんだけどね」

「は？ 明久、何言つてやがる、おまえは」

明久の発言が理解できず、坂本が問い返してた。

「確かにね。理由があるって言ったけど、日にちをおいても“僕は”
構わないよ」

「っ！……」

既に詰んだかしらね？

「雄二はどうか知らないけど？ それにいざとなったら、向こう
から仕向けるようにすればいいだけだし？」

「はあ……明久に追い詰められるとはな……。おまえの入れ知恵か？」

「ふふっ……。さて、どうかしらね？」

坂本が諸手を上げた。
もろて

「完敗だ。どのみち言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

やっぱりね。謀ろうなんて数年早いんじゃない？

「で、雄二は何がしたいの？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくな」

「それが全てかしら？ 坂本」

「さあてな」

自信に満ち溢れた意地の悪い笑みを浮かべていた。

「それにおまえらのお陰で、俺はAクラスに勝つ作戦も思いついた

し——おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

ふーん…… Aクラスに勝つ……ね。

神の薬が見ててあげる。…元神童、失望させないで頂戴よ？

さ、見せてもらおうかしらね…… 神童と呼ばれた男の力を。

第九問 秋葉（あきば）くんバリに言ってみた。秋葉（あきは）じゃないよ？

秋葉くんは、かなざ。

秋葉は結構いるか……宇宙をかける少女（獅子堂秋葉）とか、月姫（遠野秋葉）、後は……なんかいたかな？

今回さらに短い。

でもどーぞ。

第九問 秋葉（あきは）くんバりに言ってみた。秋葉（あきは）じゃないよ？

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓を先生が持ってきたボロの教卓と替えて、気を取り直してHRが再開される。

「えー、須川^{すがわ} 亮^{りょう}です。趣味は――」

特に何もなく、淡々とした自己紹介の時間が続いた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」
「了解」

坂本で最後のようだ。

先生に呼ばれて坂本が席を立て、ゆつくりと教壇に歩み寄る。その姿にはいつもの巫山戯た雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えた。一瞬だけどね。

「坂本君は、Fクラスの代表でしたよね？」

先生が坂本に尋ねると、鷹揚に頷いていた。……………Fクラスの代表なんて自慢にもならないわ。それにも関わらず、坂本は自信に満ちた顔で教壇に上がり、こちらの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「ゴリラ」

「明久、絶滅危惧種なんだからあまり虐めちゃダメよ？ ストレスで死んじゃうかもしれないから」

「おい！」

「そうだね」

「そうじゃねえ！」

何を騒いでいるのかしら……檻に入れるべきよ。麻酔薬あったはずよね……大人の象が1〜2秒で昏睡するのが。

「しかも、世にも珍しいゲイゴリラだからね」

「どなんだ！？」

「略してゲリラね」

「おかしいだろっ?!！」

「「そう?」」

「つく……。話が逸れたな……。さて、皆に一つ聞きたい」

坂本持ち直したわ。つまんない。

坂本はゆつくりと、全員の目を見るように告げる。間の取り方が上手い。いつの間にかみんなの視線は、坂本に向けられていた。

クラスの様子を確認した後、坂本の視線は、教室の各所に移りだす。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

クラス全員が、坂本の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

雄二は一呼吸おいて、静かに告げる。

「――不満はないか？」

「大ありじゃあつ!!」

『

2年F組生徒の魂^{バカ}の雄叫び。雑兵共は乗せやすいみたい。^{モルモット}

「だろう？ 俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『理科たん、虐めて! ハアハア...』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ! 改善を要求する!』

「!」

……何、今の。

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』

堰を切ったかのように次々とあがった不満と屑の声。

「みんなの意見はもつともだ」

Fクラスの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不気味な笑みを浮かべてさっきのセリフを無視した。……罰が必要ね。木下に快く同意をもらって、言ってもらおう。

「雄たん萌へ（え）っ」

「誰だっ！？　殺すぞ！！！」

ねちっこい声を出してもらったのが良かったのかしら？　過剰なくらい反応を示したわね。

「雄二、どうでもいいから続けて」

「いや！……まあいい。とにかく、これは代表としての提案だが――」

野性味満点の八重歯を見せ、

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第十問 恩を仇で返すなんて不義理は有り得ん。義理と任侠の狭路（おとこみち

女でも言っんよ？ 同じ事。

b y・瀬戸 燦

暮灘雪夜さん、D r・クロさん、龍夜M k 2さん感想ありがとうございます。
ございます。

さて、今回のタイトルは――

『瀬戸の花嫁』知ってるかな？

モモーイが歌うやつ。

ほとんど進んでないけれども、よかったらどうぞ。

第十問 恩を仇で返すなんて不義理は有り得ん。義理と任侠の俠路（おとこみち

Aクラスへの宣戦布告。それは、このFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思わないだろう。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『阿部さん、いや、阿部様がいれば安泰』

『雄たん、ハアハア…』

「「誰だ（誰よ）！」」

「俺はこの拳に全てをかける！」

「 $\text{Hg}_2(\text{NO}_3)_2$ 。今手元にあるのは硝酸水銀（Ⅰ）だけね…

…目も皮膚も腐食させてあげるわ」

硝酸水銀（Ⅰ）。別名、硝酸第一水銀。化学式： $\text{Hg}_2(\text{NO}_3)_2$ 。

ラットに経口投与した場合の半数致死量（LD50）は170 mg/kg、経皮投与した場合の（LD50）は2330 mg/kg。眼や皮膚への腐食性がある。摂取した場合は主に腎臓や神経系に影響が及ぶ。これ自体は不燃性であるが、酸化剤であり周囲での燃焼を助長する。加熱による分解で腐食性・毒性のある煙霧を生じることがある。

「理科、落ち着いて。僕や理科にまで被害が及ぶよ？」

「ガス室を作り上げる方が確実ね」

「怖ええよ！」

坂本。次の獲物は…あなたかもしれない……

「とにかく、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、坂本はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡っていく。

個人戦なら、勝ち目はあるんだけどね。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

ゲリラの言葉を受けてクラスの皆が更に騒めく。

「それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべて、壇上からみんなを見下ろす。

「聞いてあげる。説明なさい」

「はあ…、ったく。おい、康太。畳に顔つけて姫路と阿部のスカート覗いてないで前に来い」

「……………！？ ブンブン」

「は、はわっ」

「ねえ、見る？」

スカートの裾を持って、下着の見えるか見えないかのラインまで
ずり上げる。

「……おおーっ……」

クラスが揺れた。……何？ 物好きが多くない？

「お代はあなた方の命で」

「……おいっ！？」

「冗談よ。ぼそっ 半分は」

「で、だ。姫路と阿部のスカートを覗き込んでいたのが、土屋康太。
こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

「………！！ ブンブン」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。……けれど、ムツツ
リーニという名前は別。知る人ぞ知るその名は、男子生徒には畏怖
と畏敬を。女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。らしい。ホントに
……Fクラス以外も駄目なんじゃないかしら。

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る土屋。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、土屋は顔についた畳
の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

「ムツツリーニだと……？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして

いるぞ……」

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』
『実は俺もムツツリだ』

今のカミングアウトは必要だった？

「ムツツリーニ、仲間がいたみたいだよ？」

「……………！！ ブンブンブンブン」
「????」

姫路は頭に多数の疑問詞を浮かべてる。あだ名の由来は、『ムツツリスケベ』。姫路に教えてあげよ。

「姫――」

「おおーっと！ 雄二、続けて」

明久、人前で羽交い締めだなんて、…大胆になったわね。翔子に

……

「ぼそっ 余計なことと言わなくてもいいからね？」

何で解ったのかしら？

「おう。…姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその
実力はよく知っているはずだ」

今、凄い眼差しを受けた気がするわ。

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ。主戦力だ。期待している」

1年の時学年4位だった実力者。期待するのも仕方のないことかもしれない。

因みに、2位と3位は存在せず、同立1位が二人いる。名前は公開されてはいないけどね。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらなないな』

『阿部様がいれば勝つる』

『霧島さんは俺の嫁』

——瞬間。とある3人から攻撃されて公言者を撃沈。

「木下秀吉だっている」

何事も無かったかのように再開……間違えた。何事も無かったわ。秀吉は美人な男の娘として有名。演劇部のホープのこととか、Aクラスにいる双子のお姉のこととかでも有名だったりする。

『おお……!!』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

『秀吉、可愛いよ秀吉』

「当然、俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか?』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『雄たあん』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

「誰だあつ！？」

坂本を呼んでいる声にまた叫ぶ。

でもまあ、クラスの士気は確実に上がっていった。思った通りね。けれど、数学がBクラス並の島田美波を呼ばないって事は知らないって事よね。それならばきつと、他の人の点数についてe t c エトセトラ…知らない事があるのね。

「それに、吉井明久と阿部理科だっている」

……シン――

そして一気に下がる。オチ担当？ チラツと明久に目をやる。

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕らの名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要ないよね！」

ふっ…。よく言うわね。あ、坂本が“いつもの”バカな明久に戻ったって安堵してない？ そんな嫌だったの？ 明久に言い包め^{くる}られたこと。

『誰だよ吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

『じゃあ、阿部理科ってのは？』

『さあ？』

『おデコちゃんだろ』

バンド使ってオールバックにしてるだけでしょうに。坊主だったらどんな反応をしたのかしらね。——とりあえず、明久と翔子には怒られるわね。

「って、ホラ！ 折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！

僕は雄二達とは違って普通の人間なんだから普通の扱いを——ってなんで僕を睨むの？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「む…そうか。知らないようなら教えてやる。こいつらの肩書きは——《観察処分者》だ」

「「え？」」

どういうこと？ むしろ、どういふつもり？

「理科もだったんだ（知ってたの？）」

明久が話ながら唇の動かし方を変えている。腹話術の要領で話している訳だ。相変わらず無駄にすごい技術ね。勿論、明久には劣るけど、できないこともない。

まあ、新薬開発研究中とかだと何処で誰が見ているか解らないもの。事実、盗聴、盗撮は頻繁にあったし、探偵や隣人に扮した何処ぞのスパイなんてのもいた。リアルでそんなのがいる事にも驚いた。

『なあ、……《観察処分者》って、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違ふよっ！ ちょっとお茶目な１７歳につけられる愛称で（

その方が都合がいいって事かな？ どう思う、理科)」

「やめなさい、明久。みつともないわ。潔く認めるのよ（同意見よ。焦って綻びでもしたら相手の思うツボだし）」

因みに、永遠の17歳です。おいおい（全く、面倒な事になったわ…）」

挙げ足取りなんてやられてしまえば、きっと余計な要求をされる。ホント、意地悪婆さんだわ。

「そうだ。《観察処分者》っていうのは、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！（この後行く？）」

「言っていい事と悪い事があるわ（そうね。これが終わった後でいいでしょ）」

「あの、それってどういうものですか？」

姫路が小首を傾げて聞いてきた。頂点に近い場所にいた姫路に、この単語は馴染みがないんだろう。知ってるからってどうってことはないけど。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類いの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣で熟すといった具合だ」

そう。本来、召喚獣は同じ召喚獣は触れるが、物に触ることができない。召喚フィールドとか、立ったりすることはできるみたい。他はただの霊で、《観察処分者》は実体化させた霊ってところかしら。例えにまでオカルトを含めてしまうのは、アレなだけだ。

「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利

ですよ」

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ（とりあえず、影ながら頑張りますか）」

「そうね。自慢できる事じゃないもの（そうね。さっさと終わらせてしまいましょ。話しないと）」

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』
『だよな。おいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

あら?

「理科は!？」

『阿部さんは俺が守る!』

『いや、おれが!』

『俺も!』

カミカゼ部隊でも作ろうかしら?

「ああ、そうなる。だが、気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚共だ」

「雄二、そこは僕達をフォローする台詞を言うべきところだよな?」
「カス共に言うべきこぶあつ!?!?!」

カミカゼ隊は、言葉だろうと危害を加える者に容赦は無し、と。
メモメモ……

「と、…とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征

服してみようと思う」

「——理科」

「ええ」

行きますか。

「皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『『『当然だ!~!』』』

ノリノリね。

「ならば全^{ペン}員筆を執れ! 出陣の準備だ!」

『『『おおーっ!~!』』』

テンションが上がってきたのは解るけれども、簡単に乗り過ぎじゃないかしら。…あ、そうだね。

「俺達に必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!」

『『『うおおーっ!~!』』』

「ニユーヨークへ行きたいかあっ!~!」

『『『y e a h a a ー ツ!~!』』』

「い、いやー……」

クラスの雰囲気には圧されたのか、姫路も小さく拳を作って掲げた。意外とノリがいいのね。

「うん」

「何を言っているのさ！？ 理科は！」

笑みが戻らない。うんうん。と、何度も頷く。

「何で『満足満足！』みたいな顔してるの？！」

「正解よ。何番のパネルをとる？」

「どこの！？ ていうか、何チャンスなの！？」

じゃ、そろそろ行きますか。明久に視線をやる。

「うん」と頷いている明久を横目に、教室を出た。その後ろでは

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を……明久は？ ををいつ！？ いないのか！」

何か言っているのが聞こえてきた気もするが興味無し。

そう、目指すは学園長室。今はそれだけ。

第十一問 「血染めのミズキ」ん？ ユーフェミアと園崎？？（前書き）

タイトルは、知る人ぞ知るコードギアスでっす。

R2は見えないんやけど、批判的な意見が多い気が。種運命よかマシなのかな。

キラもアスランもホントは劇的に死ぬ予定だったからもって面白い作品になってたはずなのに、無理矢理修正したから俺つえーになったとか。

第十一問 「血染めのミズキ」ん？ ユーフェミアと園崎？？

カヲルさんとの話が終わって教室に戻ってみると、アウストラロピテクスがこつちを見ていた。猿に近いただけあって獲物を狩る時に見せる威嚇の眼差しは、迫力あるわね。

「ケンカ売ってんのか！？」

「あら？」

「理科、声に出てたよ？」

言いたいのはそのいう事ではなくて、痛い目を見たのを覚えていないのかしら？ っていう事だったんだけど…。

ほら、捕獲された。抵抗虚しく、数の暴力に負けてる……。

あ、序でにしたかったのは――

「聴力検査よ。囁く程の音量で果たして聞こえるのかどうかっていう」

「実験は大成功だね！」

「ウヴオオイッ！？ 俺をがふっ！？！？」

殴り飛ばされた。さすが、半端ないわ。カミカゼ部隊は強し。

「やはり坂本は、動物界脊索動物門哺乳綱サル目（霊長目）ヒト上科ヒト科ゴリラ属。」

つまりはGorilla・学名：Gorilla Isidore Geoffroy Saint-Hilaire・とI. Geofroy, 1852・所謂、ニゴリラとヒガシゴリラに別れるんだけど、タイプ種を詳しく言うと、ニゴリラがGorilla gorillaで、ヒガシゴリラはGorilla beringei。どっちのタイプかっていうのは判別が難しいと思う。あ、新種なのかも」

「ん？ ゲイ？」

そこ拾うのね。

「違えっ！ 何回ゴリラつつうんだよ！ てめえばあっ！？」
学習しなさいよ。」

ゲイが何らかの爆発でぶっ飛ばされた。うゝん……落とした記憶は無いのだけれど。あ、さらに壁で跳ね返ったところに飛び込んで頭を掴み空中殺法から鳩尾に鋭い突きを入れ、透かさず頭を鷲掴み、物凄い勢いで引き摺って壁へと叩きつけること数回、もう坂本は血を滴らせ白目を剥いていた。

「やめて！ 坂本のライフはもうゼロよ！？」

「理科が原因なんだからね？ あ、血は見ない方がいいよ」と言われながら、明久のハンドタオルで目を塞がれる。

「目隠しプレイね？」

「ちよっ！ 変なこと言わないでよ！？」

それを聞きつつ、坂本達と移動した。後で聞いた話、坂本は這って行ったらしいわ。

階段上って扉を開けたっていう事は……屋上ね、おそらく。

「理科は、明久に目隠しされたまま屋上へと連れ込まれたのだった。きやつ！ 何する気？ 明ひ、あんっ」

どう？ 迫真の鳴き声。

「よおしいいいいい？」

「よーしいーくーん？」

「何もしてないから！ っていうか、二人は何で」

「「あっははははっ！……！」「」

「怖っ！？ 理科っ！ お願いします、やめてくださいっ！！ほら、島田さん目が虚ろで焦点合っていないし！ 姫路さんなんか、瞳孔開いちゃってるじゃんかあっ！……！」

クスッ。面白い。盲目的というのは、彼女達の為の言葉ね。……寧ろ独裁的？ ジャイアニズムの権化。言い得て妙だわ。

なんて肩を震わせて笑っていたら、

「笑い事じゃあないんだからねっ!？」

もうっ、明久。涙目で肩を掴まないでよ。

「劣情を催すでしょう？」

「なんでさっ!？」

「疑問を挟む余地なんて無いでしょうに。可笑なこと言うわね」

「おまえがなっ!」

坂本、必死過ぎ。

「ウケるわね」

坂本にはきちんと届いたみたいだ。噛み付いちゃダメよ、もうほぼ思い通りに動いてくれるようだから。

「そんなことよりも！ 吉井君は…阿部さんと何処まで行ってたんですか？ ですか？」

「クスクスッ、どこ行ってたのかしらあ？」

「何処までだなんて…恥ずかしいっ、ね？ 明久」

「ゾクッ 同意求めないで!？ ていうか、火炎にガソリン注ぐような真似やめてよ？ うげっ！ 二人の顔に今度は影が射したし！ ほら、島田さんなんて、あの眼でケタケタと嗤い続けてんだよ!???!」

あ。ポニーテイルの娘が鉄バットで素振りを始めたわ。あら、グリップの底に何か…悟、ご？ あれは名前かしら？ さと——

「誰のバット奮ってたんの!？ ひぐらしないちゃうのっ？」

「……準備完了致しました」

土屋？ 何をやっているのかしら？ あれはマイク？ 歌うの？

こほん。と可愛いらしく咳払いしてから始まった。

「私の敵（吉井を奪う者）を名乗る皆さん、お願いがあります。死んでいただけないでしょうか？」

この場の人間以外にも放送をしているのね。電波ジャックってやつかしら。

「え、今なんと？ 姫路さん？」

とりあえず静ちゃんが道路標識で銃弾を防いでくれて、ダチに手
え出してんじゃねーぞとか言ってくれるの待ってみる。……………

……青だぬきがいればねえ……

「今日の阿部理科は自由だあ」

「何言ってんのさっ」

今日も自由でした。

「FFF団の方々、皆殺しにしてください。虐殺です」

「虐殺姫ならぬ虐殺姫路さんがっ！？！？！？」

「おまいらもち着け。さすがにシュウシュウがつかんでゴザル。う
ほっ、いいゆふい」

「理科あっ！？」

ちっ……。悪巫山戯も此処までにしましょうか。

「舌打ちしたよねっ？」

「……………（サスサス）」

自分の頬の辺りを擦りながら周りの目を気にする土屋を少し上目
遣い気味に見た。

「……！ な、何だ？」

「覗いていた時の畳の後はもう消えてるよ？ ていうか、否定しな
いでよ？ ムツツリーニがHなのは周知の事実だから」

「……………！！！！（ブンブンブンブン）」

ここまでバレているのに明久の言葉を否定し続けるなんて、ある
意味凄いわね。

「土屋」

「……………（ゴクリ）。どうした」

上目遣い＋潤んだ瞳。多少は効果の見込みがあったみたい。
裾をゆつくりとずり上げながら聞く。

「——何色だった？」

「純白」

「即答か、ムツツリーニ」

「ちなみに姫路はみずいろだ。」

純白ももちろんいいのだが、同年代に比べ、色気のある阿部には黒のレースも非常によく似合うと思う。しかし、いかんせん俺が強要してしまつては些か不満が残つてしまう」

淀みなく話した土屋に吉報を。

「黒のレースなら持つているわよ？」

「……よしっ！」「」「」

男子陣が残らずガッツポーズ。瞬間。場は殺意に充たされた。

それでも言葉を紡ぎ続けるのをやめない。

「ちなみに、今日の下着はシルクだから肌触りがスゴくいんだけど——触ってみる？」

ガタツ、と例外なく反応したバカ達。殺意よりも目先の欲望が勝つたのね。ブシャアアアアッって音も聞こえるけど気にしたら負けよ。

P r r r r……。電話？

「なっ！？」

着信画面を見て絶句している猿に変わって出てあげましょう。はいつと。

『もしもし、雄……』

「はい、もしもし」

「▲ツ×ー！・——@」

地球の言語で話さないな。

『……っ！ 誰』

「シルクの下着のクラスメイト」

ここで電話を返す。

それにしても翔子、頭に血が昇って誰と話したかわかってないみたい。

「し、翔子、あのだな」

『雄二、』

ちよつと甘い感じの声を出してみる。

「んっ。電話中なんでしょ？ 今触っちゃダメよ？ 明久も？」

『話がある！！！！！』

「触つてねえよ！」という声を掻き消して、向ここの殺意が伝わる。ここは武芸者達が集う何かがあるのかしら？

「頼む！ 待ってくれ翔子！」

『雄二大丈夫。一瞬で終わるから』

「おかしいだろっ！？ 話は一瞬じゃ終わらねえよ！ ……？ 翔子

…？」

「切れてやがる！！」とキレる若者。 ……ぷっ。

「愉快ね」

「うおっふおおいつ！？?!」

キレ過ぎてテンションおかしいわよ？

あ、明久助けないと。

「ていつ「ちよつと待ったああっ！！」——何？」

「なにで殴ろうとしてるわけ！？」

「鉄パイプ」

「そう！ それっ！ “ていつ” という可愛い言い方が吹き飛ばよね！？」

そうかしら？ 顎に人差し指を当てて首を傾げる。

「“そうかしら？” と思わないでよ！？ 腕がブレて見える程の速さで奮われてたんだから！」

「正解」

よく解ったわね。なら——

「アタックちゃくんすっ。どの子を殴る？」

「本当にアタックする気なの！？ ていうか、殴らないから！」

「はいっ」

どうぞ。

「はいっ」じゃないよ！ 鉄パイプいらないからっ」

我が儘ねえ。なんて思っていると島田が目を潤ませて何か言おうとしたところで……

P r r r ……

明久にも電話。

「あ、もしもし？ どうしたの？ え、っ！？」

明久は携帯に手を当て、口元を隠す。だが、「。。。ちゃん」と聞こえる為、女の子と話しているのは理解できる。

收拾がつかなくなる前に終わらせますか。ホント、仕方ないわね。

とりあえず収めた後でお弁当を食べて、Dクラス戦の話。午後には開戦だから思考をまとめておくべきね。余計に力は曝さず、効率よく勝利を手に入れる。

明久を見やると苦笑いに混じって思考しているのだと思わせる目が時折伺えた。

坂——ゴリの話の聞いていると、ここぞというところで姫路を使うのだと解った。Dクラス代表まではほぼ力押しでしょうけどね。

影でこっそり動こうにも土屋がいるからねえ……味方とはいえ情報には漏らしたくない。土屋の情報収集能力と隠密行動は現代の忍びと言って差し支えないだろう。カラルさん以上に油断ならないかもね。

いつそのこと引き込む？ ファインダー越しに覗かせてやると言えは二つ返事で答えるわね。

……。けど今のところは保留かしら。現行のまま、でも単独行動はできるようにしておこうかしらね。遊撃として動くのはアリ……？ カミカゼ部隊を使って時々戦えばいいかな？

……ふう……。坂本、そして土屋。厄介ねホント。

第十二問 「やろっ」って簡単に言うけど、言い方によってはいやらしくなるよ

今回は銀魂風タイトル。

ヒヨウガさん、断空我さん、Dr・クロさん感想ありがとうございます。
います。

熱暴走していた前話も全体的に修正し、今回は前回より抑えた且つ理科らしさが出ている回かと。明久から離れると止める人間がないことが判明。

それでは、どぞ！

第十二問 「やろう」って簡単に言うけど、言い方によってはいやらしくなるよ

「吉井！ 木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテイルを揺らしながらこちらへ駆け寄って来たのは、明久と同じ部隊に配属された島田。ちなみに、きちんと遊撃ポジションは手に入れたわ。

ん？ 明久、どこを……

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に、二度に渡って」
「なら此方は、アンタの肋骨を折るわ。下から順に、全部綺麗に、左右に渡って」

「二人とも痛いっ！ 聞いてるだけで痛い！

そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと！」

今現在前線部隊にいるのは、木下率いる先攻部隊で、明久率いる中堅部隊は、先攻部隊とFクラスの間辺りに部隊長として配置されている。

どうするか模索し、戦場の情報を集めていると、野太い声が聞こえてきた。

『さあ来い！ この負け犬が！』

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たあつぷりと指導してやるからな？ 喜ぶといい』

『ひいつ！？ た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐えきれない気がしない！ いや、耐えられない！』

『拷問？ ハハハッ！ そんなことはしない。これは立派な教育だ。』

補修が終わる頃には趣味が勉強、特技は数解、尊敬するのは二宮金次郎。といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう。ほら、見えてきたぞ？ 理想郷はすぐそこだ」

「っ！？！？ き、鬼神だ！ 誰か、助けっ——イヤアアー——ッ
ボタン、ガチャ」

拷問で間違いないわね。洗脳もその一つでしょうし。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん？ なに？ 作戦？ 何て伝えんの？」

「総員退避。」と

「意気地なし！」

「目が、目があぁあつ！」って転げ回ってる。ム。カがいるわ。
大佐だったかしら？

「バルス？」

「チョキで殴ったね！？ 親父にもぶたれたことないのに！」

そんなご家庭はDVというのよ。

「目を覚ましなさい、このバカがつ！」

酷いわね、こいつ。すつ、と片手を上げた。すぐさま駆け寄り、
一人傳く。

「いい？ アンタは部隊長なんだから、臆病風に吹かれてちゃダメ。
木下達が点数を補給する間ウチら中堅部隊が、前線部隊に代わって
前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出した
りしたら、アイツらは補給ができないじゃない。ね？」

膝まづいている存在に声をかけた。

「須川亮、だったわね」

「はっ」

「粉末と練りわさびがあるから——」

「心得ております」

「——そう。ならば、……やーっっておしまい！」

「アラホラさっさー」

「ごめん、僕が間違っ……って、理科？ さっきから何を……」にぎやああっ！?!?」島田さん！（理科？）」

明久と目が合う。

「明久、タオル。拭いてあげて（こっちは勝手に動くから、後はよろしく）」

頷いた明久に、すぐ行動を開始する。

「手があっ！ 痛えっ!？」

クスクスクスス。あー、面白いわね……須川って。中々に使えるっ。

「須川、手を洗ってすぐ来て頂戴。移動するわ」

「——完了致しました」

1分ほどかしら？ やるわね。

移動して木下と合流。そして逐次、土屋から戦況報告がメールにてあがってくる。

「阿部、援護に来てくれたんじゃな!」

「木下、報告は受けているわ。木下はついて来なさい、他は回復試験を受けに戻ることに」

『『イエス、マム!』』』

敬礼と共に去って行った。

早速、厄介なのがいたわ。

「木下、Dクラスの清水は知っているわね？」

「うむ、知っておる」

「なら話が早いわ。島田の声で且つ遠くから清水の方に聞こえるように感じさせてこの場から離脱させなさい」

「それはちと、難しいのお」

「難しいからといって諦めるのかしら？ あなたの芝居に対する思いはその程度？」

「そんな事無いぞい！　ワシは、ワシの思いは本気じゃっ！　見ておれ」

「ええ、わかっているわ。期待して見ているから頑張って」

「もちろんじゃ」

「でも、そういつとくを見るとやっぱり違うんだって思うわ」

「ん？」

「なんでもないわ」

「そうか？」

「んもう、いいからやって？」

「「っ！！」」

須川も木下も顔赤くない？　くすつ、まあいいわ。

「がんばれ、オトコノコ」

「おう」

「わ、わかったのじゃ」

お互い返事した後、一瞬睨み合ったように見えたのだけれど……
気のせいかしら？

「お前には負けねえっ！」「お主には負けん！」

大変なのね、オトコノコって。

「木下」

「うむ。……ん　っ。——美春っ、どこっ？」

「お姉さまっ！？」

「——ウチは、こっちにいるわ。会いに来て？」

「おんっねえっさまあゝん！……！」

「「「……」」」

凄まじいわね……。あ、今のうちに姫路を所定の位置に移動させるよう土屋にメールを……

っと、もう返信？

From：土や

Subject：了解した

本文：船越女史を呼び出されたが、未到着。明久達の戦況は芳しくない。

「須川、放送室へ行つて船越先生の誘導を頼むわ。終わりに次第すぐ戻ること。きちんと考えて行動なさい？」

「ああ、任せてくれ。期待に応えてみせる」

「ええ、結果を示して頂戴」

「イエス、マイロード」

須川を見送りながら考えに耽っていると木下から指示を仰がれた。

「阿部よ、どうするのじゃ？」

「ちよつと待つて」

携帯を取り出してコールする。僅か半コールほどでつながった。ほとんど刹那の間じゃない。

「土屋、今この先にいるのは近衛部隊と代表だけかしら？」

「……いや、それに加えて数名の生徒が残っている」

「おそらく回復試験ね……。土屋、近藤吉宗を含めた3名ほどいいわ。坂本達にも気付かれないように此方へ寄越して頂戴。それと近藤にスカートの替えが欲しいからそれも持って来させて。後、姫路の準備はどうかしら？」

「……了解だ。近藤を含めた3名を向かわせた。姫路もそろそろ辿り着くはずだ」

さすが……。早いわね。土屋を上方修正しなくちゃ。

そうこうしているうちに姫路が着き、遅れて放送も始まった。

「遅れ、て、すみません」

ピンポンパンポーン♪

《連絡致します》

「気にしないでいいわ、姫路」

《船越先生、船越先生。す、…須川亮君が体育館裏で待っています》

嘘でも言いたくないのね。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

数学の船越先生（45歳・女性・独身）は、婚期を逃して、終には生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった、第一種特定危険人物認定教師らしいわ。

「すごい…ですね、須川君」

「姫路、策のうちよ。これも」

《あ、あなた欲しさに、揉め事が起きそうです。至急、体育館裏までお越しください》

ピン、ポンパンポーン♪

Dクラスから響き^{きこ}が聞こえる。士気が下がったかな？ 士気の上がつているはずのこっちは勢いのままに押し込めることも可能。絡め手として、少数が動きDクラス代表を仕留める。

「え？ ああ。そう、いうことで…すか私は」

「共にAクラス前で待機。木下“さん”と一緒に、今も辛そうにしているあなたの介抱をするから」

「急ぎ来、た為のこれ、さえ利用するんですね」

「いえ、初めからそのつもりだったわよ？」

「へ？」

「開戦した時点でDクラスの敗戦は確定したの。

くすつ。——わかる？」

「ホント、お主には適わんわい」

「来たわ」

「近藤吉宗、只今を持って傘下に入る。それと言われていた物だ」
差し出されたそれを受け取って、木下に渡す。

「それを履いて、Aクラス前へ移動するわ。ズボンは土屋に。後、土屋は余計なことはいらないこと。木下の写真までは許す」

カシャカシャっ！ パシャパシャッ！ 早速、着替え中の木下の撮影。

「これは貸し一つよ？」

「構わない」

着替え終わり頃に須川も帰ってきた。

「遅れたか？」

「大丈夫よ。須川は近藤達と一緒にDクラスを誘きだすこと。場所は渡り廊下に寄りすぎないでDクラスから少し離れた位置で」

「わかった。近藤行くぞ」

「土屋、体育の大島先生には」

「……声をかけた」

「そ。日本史の——」

「……明久のところへ既に向かっている」

「最高ね、アナタ」

「…… カアアアッ ……別に……」

「？」

顔、赤くない？ 少し首をひねった。

木下からは齒軋りを、須川からは舌打ちが聞こえた気がした。戦中だものストレスくらい蓄まるでしょうね。

あ、Cクラスに遠藤先生がいたわね。

「土屋、Cクラスへ行つて」

「……遠藤先生ならさつき声をかけた」

「ホントもう、どうしてくれるのよ？」

「……ん？」

「アナタ無しじゃダメな身体になっちゃうじゃない」

土屋が地面に頭を打ち付け始めた。大丈夫かしら？

まあいいわ。遠藤先生も来たみたいだし、作戦開始よ。

手首を上から前へと振って近藤達を動かせる。

「……打倒Dクラス！」

いい位置取りね。須川よね、確か……？ 使えるわね。あら、今の声でAクラスの数人も気づいたわね。態々見に来る物好きもいるみたい。活発そうな娘ね。

そして、Dクラスが扉を開けると同時に須川達が駆け出した。

こっちも姫路を気にする。

「姫路、大丈夫？」

「少し、楽……になつてきました」

「姫路さん体調が優れないんですか？」

おいでました。

「遠藤先生、そうなんです。授業中に倒れそうだったので、アタシ達が付き添いに」

「あり、がとうござ……います。木下さん、もう少し休んでから……っは、で、構いませんか？」

木下は当然だけど、姫路も中々の演技者ね。遠藤先生がこっちに来る前に息は整っていたはずだったものね。

戦況は…… Dクラス代表は未だDクラス前、少しAクラス寄り。近衛はサイドに展開、残りの雑兵は9人か……。思っていた以上に多いわね。今展開されているのは現国か……。あ、須川のコンビと近藤

のコンビが一人ずつ倒した。連隊2の、遊撃で隠し玉の持つ将が土屋ね。後7人、そろそろ頃合いでしょう。土屋にアイコンタクト。即座に相手のいなかった土屋は、敵の一人に“保健・体育”で挑む。現国フィールドは崩され、もう一度同じ相手と隣の生徒に保健・体育で挑み、フィールドを形成する。相手が驚いて武器を構え遅れた刹那で相手を屠り、隣の召喚獣の得物を飛ばし切り伏せ30点台にまで落としたところで漸く時が動き出した。

『Dクラス 村上裕也

Dクラス 田淵聡

保健・体育 0点

保健・体育 34点

VS

保健・体育 427点

Fクラス 土屋康太

『Dクラス村上裕也、戦死！』

「「「なっ！？」「」」

戦場にいる誰しもが息を呑んだ。くすっ……。やるわね。

土屋の援護に回れるように点数の振り分けも考えられた編成が須川によって即座に行われ、土屋から5〜6メートルほど下がって左翼に展開するのは須川の連隊、右翼に展開するのは近藤の連隊。土屋（将）を前に出した変型の鶴翼陣。

さあ、どう出るのかしら？ Dクラス。Fクラスの将は、手強い

わよ？ ふふっ……

「Fクラス須川亮だ。悪いがおまえらを討ち取らせてもらう」
棍を持った須川の召喚獣と須川が息を吐きながら構える。

ここで言っちゃダメよね……。今日、無性に言いたいこの言葉。

——やーっっておしまい！

策がダメになるから言わないけどね。

「同じく近藤吉宗。代表までの道筋を作る、だからさっさと退け」
近藤が構えをとり、目を閉じていた土屋がゆっくりと瞳を曝す。

「……戦死したいのなかかって来い。相手になってやる」

敵方も一斉に構えを作る。土屋の雰囲気吞まれたの？ アレも
充分役者な気がするわね。

「……Fクラス隠密、土屋康太。…推して参る！」

第十三問 文月新聞 『速報！ 勝利の秘訣。 文月編』（前書き）

Dr・クロさん、ヒョウガさん、雄二さん感想ありがとうございます。
ます。

今回タイトルは、『デュラララー!!』の4巻をぱけーっと見て書
きました。

そんな感じです。どぞ。

須川の棒術もさる事ながら、近藤も負けてはいない。何より、土屋が追隨を許さない。…っと、見ている場合じゃあないわね。さつさと決着をつけますか。

「じゃ、行くわよ？」

「うむ、任せるのじゃ」

「はい！ 行きましょう」

疑問符を浮かべて首を傾げる可愛い遠藤先生。その先生の手を引っ張って移動する。

「え？ え？ ちょっと、阿部さん？」

「遠藤先生、そんなに可愛い声を出さないでください。興奮しますので」

「ま、待つてください。私達は年の差がっ」

その前に性別が同じですよ、遠藤先生。

…召喚範囲に捕えた。

「遠藤先生、Fクラス阿部理科と木下秀吉が近衛の二人に英語で勝負を挑みます」

「あ、えと……はい。承認します」

「『試獣^{サモン}召喚！』」

「『なっ！？』」

驚いてる驚いてる、代表も近衛達も透きだらけだわ。ねえ？

姫路。

「くっ！……」

先に立ち直った代表が呻いて後退し始めているが、既に姫路が退

路を絶っている。

「あの……」

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはそっちだよ……？」
パニックになって現状を認識できてないわね。

「いえ、こちらで合っています。Fクラスの姫路瑞樹です。えっと、
よろしく願います」

「あ、こちらこそ」

「遠藤先生、Fクラス姫路瑞樹がDクラス代表平賀君に英語勝負を
申し込めます」

「……はあ。どうも」

「はい。試獣^{サモン}召喚です」

「試獣^{サモン}召喚！？」

平賀がとつさに反応する。何もしなかったら、問答無用で補習室
という名の魔女の窠への強制連行だから……

『Fクラス 姫路瑞樹』

英語 403点

VS

英語 119点

Dクラス 平賀源二』

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながら平賀は召喚獣を構えさせた。
けど、結果は目に見えているわ。

「ごめんなさい、これも戦争ですので」

やわらかい声とは裏腹に背丈の倍はある大きな剛剣を軽々と構え、

その得物に似合わず素早い動きで相手に肉薄して反撃の意図を与える刻も無く、一撃でDクラス代表をくだし、この戦の決着とした。まずまずよ、姫路。

ん、今の結果発表されるみたい。

【Dクラス代表 平賀源二 討死】

「Fクラスの勝利です！」

『『『うおおーっ！』』』

『『『そんなあーっ！？』』』

その知らせを聞いたFクラスの叫びとDクラスの悲鳴が混じり、耳が痛い。正直勘弁。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！ ……マジか？ 夢じゃないのか？」

「ホントだよ。これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな。笑いが止まらねー」

「俺達勝ち組ってワケだ。坂本雄二サマサマだな！」

「やつぱりアイツは凄い奴だったんだな！ 雄たんは」

坂本をベタ褒めだけれど、ぬか喜びじゃなければいいわね。

「坂本万歳！^{マンゼー}」

「姫路さんの胸を愛しています！」

「阿部！ 好きだあっ！」

「5度ほど輪廻転生してからなら考えてあげる」

「よしっ！ 約束だ」

……。このクラスにはまともな人間はいないみたい。それより本気かしら…？ 一度ならず五度までも死ねるつもり？

その自信はどこから来るの？ …………… とりあえず頑張ってみればいいんじゃない。

代表である坂本を褒め称える声がいたるところから聞こえる。坂本の方を見ると、がつくりと頂垂れているDクラス生徒達の中でFクラスに囲まれていた。

「あー、まあ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつか」
デレているのか、可愛いらしく頬を掻いている姿は見るものを不快にさせる——に違いない。

「おまえは俺を何だと思ってるんだ」

小声で言っただけだけど、聞こえてた？

「現代に蘇った原人。いえ、現れる人と書いて現人ね」

「なんだそれは」

「むしろ、変人でいいんじゃない？」

「よかねーよ」

「そうよ？ ダメ。変人は天才とも言われるんだからその方達に失礼に当たるわ。だから変態って呼んであげて？ そっちのイメージの方が悪印象だから」

「そんな俺が嫌いだった！？」

ノーコメントで。

そのようなセリフを吐いて顔を近づけたりしたら、

「雄二！ 女の子から告白させようだなんて男らしくないよ！！」
勘違いされたわ。

「あーもうっ！ 好きに言ってる。それより、だ」
すうーっと、坂本の目付きが鋭くなった。

坂本の作るうとした空気は読まず、おどけて見せた。

「そんなに気になるんだ？」

ついでに、軽くウインク。

「ああ。気になって仕方がねえ」

「モテる女は辛いわ。って、そんな睨まなくても教えてあげるわよ。
… 全く、我慢の足りない子ね」

くいつと、顎で「いいから話せ」と先を促される。何様のつもりかしら？

「単純なことよ。放課後まで待たなくとも蹴りはつけられる」「なっ!？」

「どうせズル賢いあなたのことだから、放課後の帰る人に紛れて且つ多対一でDクラス生徒を叩くというか、袋叩く感じ? になつてただろうし、決着つけられるからつけたってことよ」

「だが、不安要素が多かつたはずだ。だから俺は」

続く言葉を言ったのは、明久。

「放課後まで待つつもりだった。でしょ? 雄二」

「…ああ。おまえも見当がついてたってワケか、明久」

「まあね。雄二の悪度さならこうするかなって」

坂本のアレは納得のいかない顔というよりは、如何に自分が墮ちたのかっていうのを自覚したってところね。

ああ、そうそう。続き続き。

「まずは、Dクラスでの点数が高く簡単に排除できる清水美春を木下を使ってFクラス近くへと寄せる。それを明久と島田、両名によって排除。警戒レベルが上がって渡り廊下の中程からFクラスまでの道程を進み辛くなった上に、通ろうとしても明久の召喚獣の扱いによって通れず、弱ったところをその他共が束になって潰す。

戦死者が出れば出るほど慎重を期すようになり、進退極まってくる。Dクラスが最下層のクラスに負けるはずがないという気持ちと、連勝をしているだろう明久の存在がもしかしたら…と思わせる。ここまで整えれば、後は2枚の切札ジョーカーを切つて王キングを潰すだけ」

「ふっ、簡単に言ってくれる。

Dクラス近く…正確にはAクラス前だろうが…ま、その場で油断を誘うということは俺にはできない、おまえだからできた策ってワケだ」

どう捉えるかは坂本の勝手。A、Bクラス戦での戦力にするかもしれない。もちろん出るけど。

……次の相手……ま、Bクラスでしょうね。

Cクラスとは戦わないと予測したのは、おそらくはAクラスに対する当て馬にするだろうから。木下を使ってCクラスは噛ませ犬にされてしまうはずだ。普通に考えれば順に相手して行く力も無いFクラス。だが、試験をさせる暇なく攻め込み、切札の使い所を間違えなければBクラスにも勝てる。それは既に証明されたこと。順に攻め込まないのは次は自分達の番だと悟らせない為でもあるのでしようね。

「さあ？ 木下達だけでもできたと思うけど、自分の見えない範囲を指示しなかったのは坂本じゃない」

「だな。慎重になってたんだろ。初っぱなからというかこの先も負ける訳にはいかねえからな」

思ってた以上に真剣なのね。……ん？ ああ、戦後処理がまだだったわね。

「話中済まないんだが、いいか？」

「おっ、悪い」

「時間かかるだろうから、クラスを明け渡す作業は放課後で良いか？」

「いや、その必要はない。俺達の目標はあくまでもAクラスなんだよ。だからDクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「大きく出たね？ 坂本代表。でも、それでいいのか？」

訝しむDクラス代表。当然の反応ね。

「もちろん、条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

Bクラスの室外機……ふーん、そういうこと。でも、その程度のことで早速恩を支払ってもらいたくないわね。

「二人共、ちよっと待ってくれる？」

「なんだ？ 阿部」

「どうしたんだい？」

「Dクラス代表、平賀君。あなた方Dクラスには別の機会に恩を返してくれると助かるわ。設備を破壊させる様な無茶はさせないから……それでどう？」

バツと食いついて来たのは坂本の方だった。あーもうっ。

「おまえこそちよつと待て」

順番よ、順番。

「坂本黙って。室外機を壊さなくても窓を開けさせるなんて容易いんだから」

「っ！？ おまえ、……気づいたのか？ 俺が何をする気が」
くすりと楽しい音を零してしまう。

「ええ。先ほどの応用かしら？ 土屋と大島先生を使った」

「くっ……誤魔化しは効かねえか。悔しいが、その通りだ。もし、おまえがそれを可能にするならば俺はそれで構わない。平賀、おまえはどうだ？」

「こちらもそれで構わないよ。むしろ、さっきの条件より飲みやすくなった。……からこそその不安はあるんだけどね」

大丈夫よ、これも一つの予防線だし。

「じゃ、交渉成立かしらね。坂本、後は任せるわ」

「ちよつ、おい！」

無視して踵を返す。

次は、Bクラスね。ん、相手の代表は根本だったか。また面倒な……。この学園に全うな人間はいないのかしら？ って、学園筆頭がカルさんだからどうしようもない気もするわ。

ま、阿部理科という存在も世間一般からすれば異常な存在なんでしょうけれども。

とりあえず、情報は強力な武器になるから集めておかないとね。

おっ！！

あ、
今いい感じのイメージーションが……さっさと帰って実験し
よ。

第十四問　なくしたテガミ（前書き）

なんか、ドイツ語とか使ってますが、文法おかしかったらすみません。

今回のタイトルは、『テガミバチ』。

はてさて、今回も自由な理科。色気ならぬエロ気が……。

第十四問　なくしたテガミ

「たっだいまー」

「じゃないでしょう？　早く帰りたいんだから」
態々付き合ってるっていうのに。忘れちゃうから。

「はやくう、して？」

「ちよっ！？　理科、待つて！　僕らにはまだ早いと思うんだ！
それに場所だつて、家の方がいいし」

何を言っているのかしら明久は。うちに帰るのなんて当然じゃない。というより、さつきから言つてたつもりなんだけど……伝わってなかったのかしらね。

「よ、吉井君！？　阿部さんっ」

あら、誰もいないと思つていたけど。後半部分、若干テンションが落ちた気がしないでもないけど、明久と二人でいたつてのが気に入らなかったんでしょうし。

「あれ？　姫路さん？」

「つとどどどつしたんですか？」

なにやら慌てている様子。何？

姫路が座っている席（？）をちらりと見やる。卓袱台の上には可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。

ああ、そゆこと？

「あ、あのっ、これはっ……。これはですね、そのっ」

吃り過ぎよ、姫路。

「うんうん。解つてる。大丈夫だよ？　誰にも言わないから」

「えっと――ふあっ」

コテン、と卓袱台に躓いて転ける姫路。さらには慌て過ぎだから。その拍子に隠そうとしていた手紙が目の前に飛んできて、その一文が目に入る。

《あなたのことが好きです》

たぶん……。けれど応援はできない。翔子にも明久にも幸せになつてもらわないといけないから。

飛んできた手紙を綺麗にたたみ、明久が姫路に返してあげてる。

姫路を気遣うように笑顔で一言。

「頑張つてね、僕応援してるから」

「でも吉井君には——さんが……」

今呼んだわよね。

「ん？　どうかした？　姫路さん」

「あ、い、いえっ」

「その手紙」

「は、はい」

「良い返事が貰えるといいね」

「はいっ。……そう、ですね」

姫路は複雑そうな顔を僅かに見せて返した。

朝から船越女史らしい。というのに随分な余裕……。あ、立ち上がった。今度は頭抱えて震え出した。……忘れてたのね。ん？　スゴい勢いで出て行ったけど……

「こらあつ！　貴様、教室に戻らんか！！」

「後生ですから！　今日だけは、今日だ——いやああつ！？！？」
「船越先生、教室はこっちですよ！」

両手を合わせて合掌。

「何をやってるの？ 理科」

「須川の冥福を」

「まだ生きていると思うのじゃが…」

「鉄人も苦勞するね」

「ね？」

首を傾げてみた。

明久と目を合わせたがやはりというか落ち着き払っている。ただこくり、と頷き合つて意志疎通を終える。長年の付き合いだからこそその応対。

机に突つ伏す須川に声をかけた。

「須川、お疲れ様」

「ああ……。悪いが休ませてくれ」

「はい、コレ」と言つて物を差し出す。

「何々だ、コレは？」

「労いの品よ。大したものではないけど、美味しくいただいて頂戴？」

「もしかして!？」

立ち上がった須川の周りから声も立ち上がる。

「諸君。ここはどこだ？」

『『最後の審判を下す法廷だ!』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を！』』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きる者！』』』』

『宜しい。これより——2・F異端審問会を開催する！——』

『今日の前に原罪を侵した者がいる』

大きく出たわね。

『罪状を読み上げたまえ』

『はっ！ 被告、須川亮。（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我が教理に反した疑いがある』

『甲の罪状は女性、阿部理科（以下、この者を美額公とする）から手作りの物品の押収を行った背信行為である。』

理解しやすく言いますと、この者は、アダムとイヴばりのきゃっきやウッフを堪能しようと目論んでいた疑いがあります』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『女子の、しかも手作り弁当をもらっていたので、羨ましいであります！』

『うむ。実に解りやすい報告だ』

あ、逃げた。

『異端者が逃亡を図った！ 決して逃がすなあ！』

『『『はっ！！！！』』』』

「くっそおお！ 死んでも死守するからなっ！！！！」

須川も器用ね。是非とも見てみたいものだわ。

「明久、とりあえずお昼にしましょ」

「冷たいよ、理科。態々争いの種を撒かなくてもいいのに…」

「はい、明久。おべんと」

「うん、ありが…あ…、もしかして……。理科、…恐ろしい娘……！」

…うん？ どういうことかしら。

ま、いいわ。いつも通り屋上で食べるとしますか。

「持つよ」

「ありがと」

そうこうしているうちに屋上へと辿り着いた。

「ん〜っ。いい天気ねえ」

思いつきりのびをした。節々が気持ちいいわ。

フェンスの前…先客？

「はろはろ〜。吉井も阿部もこっち座りなよ」

「島田さんに、姫路さんも？ どうしたのさ、みんな揃って」

「本日の戦争の話をするからと思ってたからな。どうせだからメシも一緒になってことになった」

「それにしてもスゴい量だね」

確かに。半端ない。ナニ？ 重箱って。お正月は数ヶ月も前に終わったはずだけど。

「姫路がみんなにみてな」

「……かなりラッキー。今日死んでも悔いは………
………ない」

「結構あるよね…」

「ムツツリー二がムツツリー二足る所以じゃの」

「も、もしよろしければ、吉井君も如何ですか？」

「あー、ごめんね？ 姫路さん。今日も理科の弁当があるから」

「そう、ですよね…」

あーもう……。何でもここまで気を揉まなきゃならないのかしらね。
「明久、少しくらいいたいただいたら？ みんなでってことなんだし」

「んー……、そうだね。じゃあ姫路さん、僕も少しもらってもいいかな？」

「はいっ！ もちろんです！！」

「それじゃ、いただくとするか」

「……俺も」

「二人共フライングじゃないか、パクッ まったこぼあっ！?!？」

「明久!？」

「ホント、行儀の悪 バタン」

「坂本っ!？ irgendwie!？(どうしたの!?)」

「in ruhiger Weise, gesammelt, gelassen, mit Gleichmut Simada
(島田、落ち着いて)」

ドイツ語で喋る必要はなかったわね。……思わず。島田の動揺が感染ったかしら。

明久？ 起きたのね、良かつ……何をぶつぶつと……

「——川原で石なんか積んで楽しいの？ ようし！ 僕も手伝ってあげるよ」

「Aufstehen, Aufwachen Puh!, Uff! (起きなさい!)」

島田と同時に声を張り上げた。すると、今度は後ろから、

「……… バタン ……黒の下着も…見たかつ……た」

土屋の最後だった。

仕方ないわ。蘇生の秘術を使おうかな。

「明日、黒の下着を着けてくるから。頑張った人には見せてあげる」
倒れていたはずの3人がもぞもぞと蠢いた。

「はっ！ こんなところでくたばってらんねーだろ」

「……… まだまだ死ぬワケにはいかない！」

「そつだよ。まだ見ぬ明日の為にも負けられないんだあつー!」
..... 大丈夫かしら?

プチップチッ。

「褒美をとらせるわ チラッ」

「くはっ! ブシャアアッ!!!」

「はわわっ!?!」

姫路も島田も何を言っているの?

で、男子はブラジャーがお気に召したのかしら。ん? なんか..
「やん、パンツ食い込んでる」

「ははっ!?! ブシャアアッ!!!」

「阿部!?!?!」 「阿部さん?!?!?!」

「桃源郷か... 悪くねえ」

「アルカディアがこんなところに」

「ザナドゥ、俺は見つけた」

「ここがアヴァロン... ワシも本望じゃ.....」

一人増えているわ。なにそれこわい。

——さて。屋上での会話をなんとか終え（死屍累々だったから）、
教室へと戻ると.....

先に帰ってたはずの姫路の様子がおかしい。何かあったのかしら。
「姫路? どうかした?」

「え? い、いえ、何でもありません」

何でもないって顔じゃないけど、本人が言うんだから仕方ないわ。
「そ」と短く返事して手をひらひらと振る。Bクラス戦は目前だ

つてところで不安は抱えたくないんだけど……コレばかりは、もうどうしようもないわね。

「ふう……」

「どうしたの、理科」

「テスト」

チラリと横目で明久を見やる。

「本気でやるってこと？」

明久の言葉に頷いて、腰に手の甲を当てる。

「そうよ。嫌な予感がするし……、不安要素が生まれたから」

「解った。僕は得意科目だけは全力を尽くすよ」

言葉もなく、首を縦に振るだけ。

席に着いてテストの準備をしながら愚痴を零していた。

「ホント。儘ならないわね、全く」

視界の端に映った姫路の、少し俯き加減なその表情が妙に気にな

り、頭に焼き付いた。

第十五問 青い春。初春は関係ない。（前書き）

初春は、『とある科学の超電磁砲』。
今回は色々ってか理科のターン。

第十五問 青い春。初春は関係ない。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本が机に手を置いてみんなの方を向いている。きつと阿部理科という天才の背中も見えているはずだ。顔じゃなく背中というのがポイント。しかも後ろの席(?)だから誰もいない空間が広がっている。

「どれだけ坂本の話聞く気が無いのかというと」

「ああ、よく伝わっているぞ、阿部」

「やめてっ！ 想いが伝わっているだなんて勘違い……………ストーリーカー……………」

「なっ！？ 違っ！」

「諸君。ここはどこだ？」

「『最後の審判を下す法廷だ！』」

「美少女がストーカーされているみたいなんだが、どうすればいいと思う？」

「『死刑！』」

「よし、解った。坂本、死刑！」

「『ヒヤッハアーー！！』」

執行までの早さが有り得ないわね。とりあえず……………
美少女祈禱中？…

猿共戦闘中…

「はあはあっ……少しは熟考しろ！」

とにかく、午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分みたいだな」

お茶を飲み終わっても続いてたけど、漸く終了。

『はあっはあっ…、おうよ！』

一向に下がらないモチベーション。Fクラスの武器の一つね。士気は結果に影響されることもしばしば。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない、解るな？」

『おおーっ！』

本当に理解してるのかしら？ 適当に返事してない？

「そこで、前線部隊は姫路瑞樹に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「が、頑張ります」

ムリに乗ってるってわけでもないのかな？ 周りに必死で合わせようとしているようにも見えるけど……

『うおおーっ！』

「……………はあ……」

前線部隊の叫びに紛れるほどに小さなため息。

姫路の事みんな気づいてないみたいだけど、明久も気づき始めているわよ。

何より、陰りが見えるのよね…あの笑顔。

キンコンカーンコン♪

昼休み終了のベルが鳴り響く。これでいよいよBクラス戦開始だ。
「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッスアー』

敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いは必要になる。
今回の此方の主要武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、
なぜか長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのが理由。他にも英
語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。理数系メイ
ン——まさしく独壇場。

「いたぞ、Bクラスだ！」

開戦の声を背中に受けながら布施先生を伴って階段を降りていく。
渡り廊下の中ほどまで来たところで、前から二人の少女と西村先
生が歩いて来た。

「あなたが…阿部さんね？」

「さあ、知らないけど？ 何方かと勘違いなさっているんじゃない
？」

「白々しい。西村先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス阿部理科
さんに総合科目で勝負を申し込みます！」

どの阿部さんと呼んだのか知らないから、別の誰かと勘違いして
いるのでは？ という意味合いを込めて言ったのだけど。

「別ルートには、鉄巨人が配置されているだなんてEXステージ突
入。って？」

「何を訳の解らない事を……」

相手の目を覗き込んで言う。

「ねえ。階段のところにも配置しているんでしょう？ 呼んだら？」

「はい？」

先ほどよりもさらに声色を低くする。

「呆気なく散りたいの？」

その言葉に反応してか、それとも、岩下つてのがびくつと慄^{おの}き始めたのがきっかけか……

「律子、私も手伝う！」

階段の方から一人駆け寄って来た。

さあ、

「戦いましょう？ 楽しいことは、これから始まるわ」

「「「試^{サモン}獣召喚！」「」」

喚声に応えて魔方阵が展開。

敵の二体は、フランベルジェという波状の剣を持った岩下とギサルメという斧槍を体勢低く構えた菊入。

相対する召喚獣は、バンドをした髪に白衣と実験用滅菌手袋を装備したどっからどう見ても科学者然としたいつもの姿。それに加えて目につくのが、手首に巻かれた腕輪。

「そ、それって！？」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない！」

「努力をすれば、届くかもしれないわよ？」

『Fクラス 阿部理科

総合 5051点

VS

総合	2063点
総合	1889点
Bクラス	岩下律子
Bクラス	菊入真由美

「ちょっと待ってよ!? 何、その点数っ!」

「律子! 落ち着いて! とにかく戦わないと」

「えいつ」

召喚獣がチビ菊入の口内に黒い丸薬を放り込む。

「「えっ?」」

爆発。

「「ええーっ!?!」」

点数は一気に1000は削った。
さすがに内部破壊は強力ね。けど、口内に入る程度の薬品じゃあの程度か。

二体いるし、腕輪で一気に片付けるかな? 消費が大きいから気をつけないと……。あの先と、さらには近衛の排除。

すっ…、と。一人、召喚範囲の外側ギリギリに立った。

「面倒ね、かかってらっしやい」

「それが終わったらな。」

「ったく。根本の言った通りか。厄介だな」

根本って確かBクラス代表、よね。……時間稼ぎ? それほど警戒されているってこと? 情報は漏らしていないはずなんだけれど——あ。去年の事を知っているってこと? それとも翔子との関

係性から？ どちら共確証は得られない。ん………

「とりあえず、目先の目標を駆逐するか。」

フレイムスロアー

【火炎放射】」

キーワードを紡ぐ。

この武器の点数消費量500点。中距離武器っていうか兵器。放ち続けている間1点ずつ消費していく。当たるとダメージ+火達磨になって相手にダメージを与え続けるもので、短期決戦には持つてこいなんだけど、明久並に操作の上手い人だと避けられて此方がキツイ、使い辛い兵装ね。

この腕輪の能力は、科学・化学の武器、兵器を生み出す力。

何そのチートって思ったヤツは大間違い。使う兵器、使う兵器にデメリットがもれなくついてくるワケ。腕輪を使わない方が強いけれど、それはカヲルさんとの契約に違反するからね。

「ハア……」

「真由美、行くわよ！」

「ええ！」

早速の弊害。なんて面倒くさい。思わずガシガシと頭を掻いた。デカくて重そうな【火炎放射】のせいでさっきよりも動きが鈍くなっているのだ。

岩下の召喚獣が右から回り込み、菊入の召喚獣が左寄りに真っ直ぐ突っ込んで来た。

よくコンビを組んでいるのか、他の人間よりも操作が上手い。が、明久や翔子の攻撃を捌いているので、捌けない事もない。けど、近接戦闘が得意ってワケでもない。

「当たれえっ！」

剣が奮われる。大振りな袈裟斬りから、刃が股下の地面にぶつかって跳ねた反動を利用し、そのまま地から天へと真っ直ぐに斬り上げた。

「イヤ、よ！」

何とか避けられたところで、

「このっ！」

菊入が、視界外から左膨ら脛を貫いた。岩下に集中し過ぎたっ。

「くっ……」

フィードバックの事を忘れてた。ちりちりと痛む。激痛は無いけれど、指にトゲが刺さった時のような痛みが攻撃を受けた箇所にある。

ただの刹那、思考が乱れた。

その僅かな透きを逃すまいと、岩下が突きを繰り出す。難なくそれを躲した瞬間……

「もらった！」

声と共に気がついた。“躲させた”んだと。

脇腹辺りにある剣を、咄嗟に右手で抑え込もうと刃に手を伸ばした。と同時に上体は、軌跡を描くであろう場所を予測して無理矢理体を反らして急所を遠ざけた。それでも、

「っあアッ!？」

焼けるように右腕の内側が痛んだ。

さっきよりもフィードバックが大きい！

腕を一本持つてかれた。

受けるダメージによってフィードバックも変わってくるの？

「ハア、ハアッ……」

もしかして、疲労も？ 体力が落ちて防御力も下がるって？ 冗談じゃない。

「……遊びは終わりよ」

刺さった槍はそのままに、斬り上げ終わっていない状態の剣の下を潜り抜けざまにシリンドラーを地面に叩きつけ、槍を離そうとしていない菊入を岩下へとぶつける。

で、碎けたシリンドラーに入っていたのは、気化性爆発物。さあ、避けられるものなら避けてみなさい。

振り返りながら左に抱えていたそのトリガーを引く。

「灯蛾の如く燃え尽きなさい」

「ちよつ!？」

「そんなっ!？」

「答えは聞いてない。バイバイ」

一直線に火線が伸びる。途中から二体を包み込むように炎が動いたのは、気体に触れたせいね。

爆炎が包んだ。

渡り廊下の窓ガラスを揺らす轟音。

「「キヤアアツ!!!」」

さらに二人の近くまで炎が迫っていったんだもの、悲鳴を上げるのもムリはないわね。

『Fクラス 阿部理科

総合 1473点

VS

総合 0点

総合 0点

Bクラス 岩下律子

Bクラス 菊入真由美
』

油断してた。何処かで見下してたのかもしれないわね。

岩下と菊入に手を差し出した。

「あなた達かなり強いわね。Aクラスにも通用するわよ?」

「お世辞でも嬉しいかな」

「そうだね」

順に握手を交わす。それと訂正も。

「お世辞なんかじゃないわ。さっきの点数見たでしょう？ あなた達は、それだけスゴいの。だから、勉強ももうちょっと――」

「努力をすれば、届くかもしれない？」

「真由美、それって……」

「うん。さっき阿部さんが言ってた言葉」

そこまで思ってたわけじゃないのにね。頑張ってたほしいとは思ったけど……。

「過程があるからこそその結果。努力無くして成果無しよ。」

ま、頑張んなさい」

「「はいつ！！」」

何だか……

「青臭い上に照れ臭いわね」

「あははっ、そうかも」

「ふふっ……。いいと思うけどな、十代なんだし？」

青春？ まあ、悪くは無いかもね。

「そうね」

「じゃ、私たち補習だから」

「またね。阿部さん、頑張って」

「お互いに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5786r/>

元バカと黒髪美少女と薬師

2011年10月12日04時00分発行